

修士論文(要旨)

2014年7月

母親の子育てレジリエンスと育児にまつわる諸感情に関する研究

指導 山口 創 教授

心理学研究科  
健康心理学専攻

210J4052

鬼澤希

## 目次

### 第1章 序論

#### 第1節 はじめに

#### 第2節 研究の背景(現代の子育て環境について)

- 1) 国の施策
- 2) 茨城県水戸市の施策
- 3) 茨城県ひたちなか市の施策

### 第2章 先行研究

#### 第1節 先行研究

##### I)レジリエンス

##### II)育児レジリエンス

##### III)育児不安

##### IV)育児ストレス

##### V)ソーシャルサポート

#### 第2節問題

### 第3章 本研究の目的と意義

#### 第1節 本研究の目的

#### 第2節 本研究の意義

#### 第3節 仮説

### 第4章 研究方法

#### 第1節 調査対象

#### 第2節 調査方法

#### 第3節 調査内容

#### 第4節 倫理的配慮

#### 第5節

### 第5章 結果

#### 第1節 調査対象者の属性

#### 第2節 分析結果

### 第6章 考察

### 第7章 総合考察

#### 第1節 補足資料

#### 第2節 総合考察

### 参考文献・引用文献

### 謝辞

## はじめに

子育て支援という言葉を目にする事の多くなった昨今、育児とソーシャルサポートの関連性については、先行研究においても、育児の不安の程度に関連する大きな要因として1つは夫婦関係、もうひとつは母親の社会的な人間関係のあり方、母親の感じるサポート不足である(牧野 1982)や、家族の情緒的サポートが、育児期の女性の自己を充実させる(野口、新川ほか 2000)などのいくつかの報告があり、さらに医学の分野でも、豊かなサポートを得られることで生活上のストレスを体験することが少なく、健康への予防的な効果がある(金沢 1995)と報告されている。

そういった流れの中でも、育児をしている親の中で地域子育て支援拠点を利用しているのはまだまだごく一部であり、利用している親の層にも偏りがあることも想定される。しかし、こうした社会的支援が整備されてきた一方で、これまでの地域ネットワークの中で、相互扶助的に展開されてきたはずの「子育て支援」がサービスとしての支援に移り変わりつつある現状は見逃してはならない。「支援」という言葉がひとり歩きをし、母親をはじめとする養育者が受身での子育てサポートを享受し続けることは、母親自身の子育てに向き合う力(子育てと向き合い、成長していく力)の低下を招くばかりか、相互扶助という社会的資源の喪失につながる懸念がある。子育てを通して地域資源を活用しながら子育て力を獲得し、「子育て」という経験がライフステージをより豊かにするものとして認知されるよう取り組むことで、子育てにまつわる社会的な諸問題「少子化・児童虐待・育児の孤立・育児不安」の解決の一助として有効な手段を増やせるのではないだろうか。子どもの育ちを社会全体で地域で支えようという概念が広がりつつある今、もう一度立ち止まって、子育て当事者のニーズとソーシャルサポートの本質を確かめ、子育てに携わる者、子育てを支える者、双方一体となり、こどもを産み育てやすい地域づくりをともに育む段階にきているのではないだろうか。

## 本研究の目的

本研究においては、乳幼児を養育する親はどんな環境の下に子育てと向き合い、自らの子育てについてどのように認知しているのか、またその認知の度合いは、「子育てレジリエンス」(育児における諸問題に向き合い、立ち直りを導く力)とどの程度の関連があるのか。母親自身が持つ「子育てレジリエンス」の機能が育児不安や育児満足度、そして妊娠出産の満足度がどのように関わっているのかに焦点を当てる。またその養育環境の土台として、親自身が育ってきた中で、実際に乳児にふれあった経験、多世代によって養育された経験の程度が現在の育児にどの程度影響を及ぼすのかを明らかにし、今後の地域において、少子化対策および児童虐待防止、産み育てやすい環境を創出していくことを念頭におき、子育て当事者の主体性を重んじた子育て支援の施策を考える上での一助とする。

## 研究方法

### 調査対象者

未就学児を養育中の保護者 257 名を対象として調査をおこなった。母親の平均年齢は 33.48 歳、養育している子どもの平均人数は 1.59 人、第一子の平均月齢は(42.4 ヶ月)、第二子の平均月齢は(37.5 ヶ月)であった。職業別人数は、専業主婦(186 人)、パートタイム就労者(20 人)、フルタイム就労者(41 人)、自営業(9 人)その他(内職 1 人)であった。回答拠点別人数は、公営子育て支援センター(144 人)、子育て支援 NPO 拠点(35 人)、母親による自主活動・サークル活動(42 人)、その他(36 人)であった。回答者居住地別人数は、水戸市(115 人)、ひたちなか市(110 人)、つくば市(17 人)その他都市部(5 人)その他郊外(10 人)であった。

## 調査方法

- 1) :調査時期:2014年5月～6月
- 2) 配布および回収方法
- 3) 利用者の承諾を得ながら配布し、その場で記入してもらい回収するか、後日配布担当者に手渡ししてもらい回収した。総回収数 315 部、うち母親による欠損値のない有効回答 257 部を分析の対象とした。
- 4) 使用尺度

### 【1】「子育てレジリエンス」尺度

下位尺度にペアレンタルスキル(10 項目)、ソーシャルサポート(9 項目)、「母としての肯定感」(8 項目)を持つ質問紙項目を使用した。

### 【2】「母性意識質問項目」

下位尺度(育児不安・不満感(9 項目)、「育児満足感」(6 項目)、夫のサポート感(3 項目))から構成される質問紙項目である。

### 【3】「妊娠経験尺度」・「出産経験尺度」

妊娠経験尺度(喜び(4 項目)、しんどさ(4 項目)、周囲の援助(3 項目)、「出産経験尺度」(しんどさと不安(4 項目)、親族の援助と喜び(3 項目)うれしさ(2項目))

以上、4 つの尺度を用いて調査、分析をおこなった。

## 結果と考察

### 1. 子育てレジリエンス尺度全体の得点と、母性意識質問紙項目、妊娠出産尺度の尺度得点について

まず、子育てレジリエンス全体の尺度得点と母性意識質問紙項目、妊娠出産尺度について相関分析を行った。その結果、子育てレジリエンスと母性質問紙項目、妊娠出産尺度の妊娠尺度の項目について有意な正の相関がみられた。すなわち、子育てレジリエンスと母性意識や妊娠の経験には有意な関係があることがわかった。

### 2. 子育てレジリエンス尺度の下位尺度と母性意識質問紙項目の下位尺度の相関について

次に、子育てレジリエンスの下位尺度と母性意識質問紙項目の下位尺度得点について相関分析をおこなった。その結果、ペアレンタルスキル、ソーシャルサポート、母親としての肯定感それぞれにおいて、育児満足感、夫のサポート感の 2 つの有意な正の相関がみられた。この結果から、親としてのスキルが高いこと、周りの社会的サポートを強く認識できていること、母親としての肯定感が保たれていることは、育児満足感と夫のサポート認知に深く関係していることがわかる。育児の不安の程度に関連する大きな要因として 1 つは夫婦関係であり、母親の感じるサポート不足である牧野(1982)の先行研究からも、夫のサポートを肯定的に認知している母親は、育児を肯定的に捉え、母としての肯定感を得やすいことが示唆されている。

### 3. 子育てレジリエンスと妊娠出産経験尺度の下位尺度の相関について

また、子育てレジリエンスと妊娠出産経験尺度の下位尺度の相関について、「子育てレジリエンス」のペアレンタルスキルと妊娠・出産経験尺度の妊娠では周囲の援助と有意な正の相関がみられた。ソーシャルサポートと妊娠の下位尺度では、周囲の援助、喜びにおいて有意な正の相関がみられた。出産の下位尺度では、親族の援助うれしさにおいて有意な正の相関がみられた。母としての肯定感と妊娠の下位尺度では、

周囲の援助、喜びにおいて有意な正の相関がみられた。また、出産の下位尺度では、親族の援助と喜び、うれしさについて有意な正の相関がみられた。このことは、寺見ら(2008)の研究において育児充実感と妊娠経験尺度因子の「喜び」に関して関連が見られ「周囲の援助」では関連傾向が見られたと報告している。周囲の援助すなわちソーシャルサポートの認知は、妊娠の喜びに深く関連があると言える。

#### 4. 「子育てレジリエンス」と過去に子どもを世話した経験に関する一元配置の分散分析について

「子育てレジリエンス」の下位尺度と過去に子どもを世話した経験の分散分析についてソーシャルサポートにおいて、経験ありと経験なしの群の中において有意な差がみられた。小学生を対象とした赤ちゃんふれあい体験学習の試み片山ら(2003)の研究結果として、赤ちゃんとのふれあい体験後には、男女ともに「異性ととも助け合って子育てをする」という意識が高まったという報告や、中学生を対象とした赤ちゃんふれあい体験学習の研究結果として、ふれあい体験の前後で乳幼児イメージが具体的になり、親の育児責任を認識するようになった佐藤(2004)という先行研究の結果からも、過去に子どもをあやしたり、ふれあった経験は、男女の差なく、乳幼児に対する具体的な世話役割の認識を生み、肯定的な育児責任を引き出す効果があると推測される。

#### 5. 「子育てレジリエンス」と過去に異年齢の友人と遊んだ経験について

「子育てレジリエンス」について下位尺度と、異年齢の友人と遊んだ経験についてペアレンタルスキルにおいて各群間に有意な差がみられた。本項目の結果に関して、「まったくあそばなかった」を選んだ人数が3人と極端に少なかったため、その割合を換算しないで検討した結果、「ソーシャルサポート」、「母としての肯定感」の2つの下位尺度に対して直線的な関係性がみられた。相沢による、異年齢集団活動を有機的に機能させるための一考察では、同年齢集団内とは異なる価値観をもった児童を理解しながら協力をして活動していく過程において、他者の考えを受け入れる態度や心情が育ちやすい。さらに共生意識の高まりの中で、上級生がリーダーシップという「役割行動意識」を身に付け、貢献感を味わうことにより、承認の欲求が満たされていく。異年齢のかかわりの中で、役割や共生への意識を高め、年役割を通じた貢献から、自分を肯定する力が備わっていくものと考えられる。

以上の結果と考察から、子育てレジリエンスの高い母親は、妊娠における喜びが高く、育児においても、夫や周囲のサポートを肯定的に認知することから育児不安が低く、育児満足感が高くなる傾向があるといえる。また、育児レジリエンスと過去の乳幼児世話経験においては、ソーシャルサポートへの関連、異年齢との関わり経験については、ペアレンタルスキルと母としての肯定感に、弱いながらも関連がみられた。何歳ごろのどのような経験が、現在の子育てレジリエンスに影響を与えているのかについてはさらなる調査と検証が必要ではあるが、あかちゃんふれあい体験の意義を探求する一助として有意義な結果だといえる。総じて、子育てレジリエンスの高い母親は肯定的で柔軟な子育てがしやすい傾向にあることが本研究においても明らかとなった。今後、自治体や地域の助産院などと連携し、母親支援の視点として、育児レジリエンスの重要性を伝えるとともに、育児レジリエンスを高めるワークショップなどを定期的、継続的に行うなどし、地域における、有益な育児支援体制構築に貢献していきたい。

## 参考文献・引用文献

- ・有北いくこ (2010). 子育てしながら輝いて生きる -0~6歳 育児を楽しむためのママたちの声- シナノ出版
- ・荒牧美佐子・無藤隆. (2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い:未就学児を持つ母親を対象に. 発達心理学研究, 19(2), 87-97.
- ・茨城県ひたちなか市 次世代育成支援対策行動計画
- ・茨城県水戸市 次世代育成支援対策行動計画
- ・尾野明美(2014)母親の「子育てレジリエンス」に関する研究. —「子育てレジリエンス」尺度の作成及び, 子育て支援プログラムの適用を通して—. 桜美林大学大学院 国際学研究科 国際人文社会科学専攻 博士論文(要旨)
- ・尾野明未・茂木俊彦(2011)障害児をもつ母親の「子育てレジリエンス」に関する研究 桜美林大学大学院 心理学研究 第2号 67-77
- ・片山美香・清水凡生・室本美恵子・香川治子(2003)小学生を対象とした赤ちゃんとのふれあい体験学習の試み 思春期学 ADOLESCENTOLOGY VOL.21 NO.1
- ・久保由美子・長尾秀夫・宮内清子(2003) 母性意識質問紙による育児環境ハイリスクマザーの早期発見に関する研究-母性意識質問紙の信頼性・妥当性の検討-愛媛大学教育学部紀要 教育科学 第49巻 第2号 79~86
- ・佐藤洋美(2004)乳幼児とのふれあい体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響 生活体験学習研究 4, 35-54, 2004-01
- ・手島聖子・原口雅浩 (2006). 育児ソーシャル・サポートの構造 久留米大学文学部心理学科・大学院心理学研究科紀要 5 21-28
- ・手島聖子・原口雅浩 (2004). 育児不安の構造 久留米大学文学部心理学科・大学院心理学研究科紀要 3 83-88・寺見陽子・別府悦子・西垣吉之・山田陽子・水野友有・金田環・南憲治(2008)今日の母親の育児経験とソーシャル・サポートの関連に関する研究(1)-子ども家庭支援センターを利用する母親の育児ストレスとその要因-中部学院大学・中部学院短期大学部 研究紀要第9号
- ・内閣府 子ども子育てビジョン～子どもの笑顔があふれる社会のために～  
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/vision-zenbun.pdf>
- ・内閣府 平成26年版少子化社会対策白書
- ・名取市立不二が丘小学校 相澤武浩 年齢集団活動を有機的に機能させるための一考察- 教育相談的技法を生かした人間関係づくりを中心として-
- ・野口真弓・新川治子他 (2000). 育児をする母親のソーシャル・サポート・ネットワークの実態 日本赤十字広島看護大学紀要 1 49-58
- ・牧野カツコ (1982). 乳幼児を持つ母親の生活と<育児不安> 家庭教育研究所紀要 3 34-56
- ・両角伊都子・角間陽予・草野篤子 (2000)乳幼児をもつ母親の育児不安に関わる諸要因-子どもの虐待をも視野に入れて- 信州大学教育学部紀要, 99, 87- 98、